



部門研究1 2003年度第3回研究会

日 時 / 2004年3月6日(土)

会 場 / 同志社大学 今出川キャンパス 光塩館地階会議室

発 表 / 鎌田 繁(東京大学東洋文化研究所教授)

コメント / 中田 考(同志社大学神学研究科教授)

スケジュール

1:30~3:00 発表:鎌田 繁「イスラームと一神教の展開」

3:00~3:15 休憩

3:15~3:30 コメント:中田 考

3:30~5:00 討議

5:30~7:30 懇談会(自由参加)

研究会概要

一神教と多神教をめぐる従来の議論は、宗教を見る視点において、その宗教の中で「神」と呼ばれるものが一かそれ以上かという数という面に着目するものであった。しかし、そうした客観的比較が成り立つのは、「神」の語によって表象されるものが同じであるという仮定においてのみである。それゆえ、日本の特殊環境において「神」によって表象される本居宣長の述べるような「尋常ならずすぐれたる徳ありて畏き物」は、日本語ではユダヤ教、キリスト教、イスラームの「神」と訳される世界の創造主とはまったく異なっている。そうであるなら比較は恣意的、主観的なものとならざるをえない。進化論的な最高段階の含みを持つ西欧の一神教理解も、また近年の日本における多神教の寛容性を称揚する議論も、ともすれば自己肯定の言説に陥りがちである。そこでこの発表では一神教と多神教という問題設定に代る視座の提示を試みる。

イスラームは、先行するユダヤ教、キリスト教をそれぞれエズラ、イエスを神の子とすることによって多神崇拝に陥っているとする。またイスラーム以前のアラブは最高神としてのアッラーを知りながら、アッラート、ウッザー、マナート、フバルなどの偶像神をアッラーと人間の仲介者と考えていた。

イスラームの神理解には、a.立法者、b.信仰内容の提示者、c.人間に内在する神、という3つの側面がある。行動の規範を定める立法者としての神に対して、人間は主人と奴隷の関係に立つ。信仰内容の提示者の神の教える神は、世界の外にある神であり、人間を超え、接点をもたない超越性である。人間に内在する神は、神秘主義の体験知の対象であり、世界と一体となった神である。

この最後のイスラーム神秘主義、「私は真理(神)である」と述べたハッラージュ(922没)に見られるような自己と神のみに専心する「排他的exclusive」神秘主義と、世界の全てを神の顕現と考えるイブン・アラビー(1240没)の存在一性論のような「包摂的inclusive」神秘主義の2つの類型を考えることが出来る。「信仰のなかに創造された真理(神)」とのイブン・アラビーの言葉にあるように、人間に対する神性の顕現という現象に着目すると、前者は凝縮的、後者は拡散的とも呼べる。後者の包摂的理解は日本で呼ばれるところの「神」にも繋がるものがある。



以上から宗教の中には性質として包摂性と排他性があることがわかった。宗教の数的側面からの分析によって、西欧では多神教から一神教への発展過程を見るが、逆に現代の日本では再び多神教への回帰を説く意見がある。それらの分析はいずれも自分の宗教を正当化する方法でしかなく、互いの宗教の理解との間には深い断絶がある。神性の凝集性と拡散性、包摂性と排他性という人間と神との関わりという新たな分析視座により、一神教の中に多神教的側面があること、多神教の中にも一神教的側面があることが見出せる。これは一神教と多神教の間の分断に橋を架ける足がかりとならないだろうか。

<コメント要旨>

異なる宗教をより客観的に比較考察するために、それぞれの宗教において非常に意味の異なる「神」自体ではなく、人間と神との関係、それぞれの宗教における信者に顕れる神性に着目する視点を導入するというのは、エリアーデのヒエロファニー概念による比較宗教学の方法への回帰とも言える。そしてその場合でもやはりそれぞれの宗教における「神性の顕れ」が果たして同一のものであるか否か、との疑問が生じ、結局異なる宗教の客観的な比較が可能か、との最初の問題に戻ってしまうのではないか。

<質疑応答>

第一にイスラームにおけるキリスト教、ユダヤ教理解に対して、それぞれの研究者の側からの意見を見ることが出来た。

また第二にそれぞれの宗教のあり方を示す「啓典」や学問の枠組みについて、類似点と相違点を比較し、互いの宗教を理解することに繋がった。

イスラームにおける神理解で述べられた、a.立法者、b.信仰内容の提示者、c.人間に内在する神との、a・b・c型は、キリスト教の三位一体の、子なる神、父なる神、聖霊、に対応するとも考えられ、三つの宗教を比較し対話を可能にする足がかりともなりうるのではないか。

(神学研究科研究生 山根 朋子)



「イスラームと一神教の展開」

東京大学東洋文化研究所教授
鎌田 繁



ご紹介にあずかりました鎌田です。先ほどの中田先生のお話ですと、今日のためになんとなく妄想をたくましくしていたことは、むしろ今年ではなくて来年用の話だったかなという気も少ししますが、今さら話を変えるわけにはいきませんので、とりあえず考えたこととお話しします。最初に私にいただいた題名が「イスラームと一神教の展開」でしたが、「展開」ですから何を言ってもよいというふうに理解してお話をさせていただきます。

これまで2回、研究会に参加していろいろお話を聞いたのですが、やはり一神教、多神教という言葉には、多神教から一神教に発展していくとかより高度の一神教になっていくというようなイメージが絶えずつきまとっているように思います。逆に最近では日本の方の中には、先ほど中田さんもおっしゃっていましたが、多神教的な様々な価値を認める態度が良いのだという、逆の意味での価値判断をかなり濃厚に含むようなニュアンスで多神教あるいは一神教という言葉を使っている場合もあるような気がします。ただこの一神教、多神教という言葉を使いますと、要するに神という言葉が同じでその上に一つかあるいは沢山かという言葉が付いているということで、それぞれの宗教でそういう意味での沢山の神を持っているのか、あるいは一つしか神を持っていないのかという数的なものだけでもものを見てしまう感じがします。

しかしそもそも、それぞれの宗教の中で神、日本語で近似的に神という言葉で翻訳し表現している言葉ですが、それが指している内容というのはおそ

らく非常に幅の広いものだと思うのです。ですから我々が何となく日本の神々と言っているような意味合い、神について持っている意味というものと、キリスト教なりイスラームなりの中で言われている神は、神という同じ言葉で表現していても指し示すものはかなり違うものだと思うのです。ですからそれだけ神という概念が示すものが違うにもかかわらず、それに一と多という数的な形容詞をつけてそれだけで区別してしまうというのは、多分、一神教、多神教ということを使う意味をかなり弱くしていくのではないかという気がしているわけです。そういう意味で、今の中田さんのお話ですと来年以降にそういう話をされることになるのかもしれませんが、とにかく一神教、多神教という議論をする前に、それぞれの宗教で考えられている神というものがどういふものなのかということをはっきりとすること、それがやはり研究を進めていく最初の道筋ではないかという気がします。一神教と我々が普通考えているユダヤ教とかキリスト教あるいはイスラームとかはかなり対照的な意味を持つ神、概念を持つ表現として、たまたま目にした本居宣長の神の定義というか神の説明を引用してみます。簡単に読みます。

「さて凡てカミとは、いにしへの御典どもに見えたる天地のもろもろの神たちを始めて、それを祀れる社にいます御霊をも申し、また人はさらにもいはず、鳥獸木草のたぐひ海山など、そのほか何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物をカミとはいふなり。」(『古事記伝』)というような言い方をしています。ある意味ではこれは人間よりもい



ろいろな意味での能力が少し強くて人をびっくりさせるようなものであれば、それはみんな神なのだというような考え方だと思います。それは世界を創造し終末まで支配し、そして終末の裁きを行うというような神の観念というようなものとは全く違うわけです。ですからもし、宣長が神とっている対象を例えばイスラームの中で言われているものと対比するのであれば、宣長の言う神をアッラーと対比させるということは全く意味をなさないことだと思います。要するにイスラーム世界でもさまざまな精神的存在というものは考えているわけで、いくつか思いつくものをあげれば、神というものも一応そうだとは思いますが、天使、シャイターン、良いことも悪いこともするジン、あるいは人間だけれども超能力的な力を持っていると思われるような人物である聖者とか、そういうものも全て、日本語で翻訳するのであれば神と言って良いような存在だと思うのです。それぐらい神という観念、概念は宗教によって意味合いが違うわけですから、まずそこを押さえてから一神教、多神教という議論をしていくのが適切なのではないかという気がします。

今、非常に対照的な二つの宗教を見たわけですが、一神教といわれているイスラームとキリスト教を比べても、キリスト教というのは神そのものだけではなくて常に子なる神であるイエス・キリスト、そして聖霊という三位一体的な形で神をとらえていくということが、おそらく基本で正統的なアプローチだと思います。ユダヤ教あるいはイスラームの神の観念になれば、そういうアプローチはむしろ否定的に見ていく、そういう性格を持っていると思います。このような意味で、それぞれの宗教における神観念に注目することの重要性を、指摘したいと思います。

お手元のレジュメのカッコの2番目の「一神教としてのイスラーム」に話を移したいと思います。イスラームで神という場合にはアラビア語でアッラーという言葉になるわけです。そしてこのAllahというのは普通説明する場合にはilahという小文字のゴッド

(神)という意味があって、それにTheゴッドであるというようなことで定冠詞(al-)をつけて、al-ilahという形になった。そしてそれがilahのiがリエゾンして落ちてAllahになったのだという説明をするわけですが、al-ilahという形そのものは本当に少ないのですが、古いアラブの詩の中などには用例が出ているそうです。ですからAllahという言葉自体はセム(Sem)的な諸宗教の中で一般的に神を示す言葉であるイルとかエルとか、ヘブライ語で言うエロヒムなどもみな関係しているセム語共通の神なるものを示す言葉であるというように見ていけるとと思います。クルアーンの中にアッラーという数はいくつあるのかというようなことは私は数えたことがないのですが、たまたまコンコードダンスを見ると書いてあったのですが2697あるのだそうです。Allahというのは定冠詞が付いているということですから、アラビア語の文法で言うと「私の神」という言い方をする時にはAllahの後ろに「私の」というような語尾をくっつけることは出来ないわけです。その場合には定冠詞を取った形で、その場合にilahという言葉が出てきて、ilah-kum、「あなた方の神」とか、クルアーンの中にあるかどうかわかりませんがilah-kumという形でilahという先ほど言った形態が出てくるわけです。そういったことから、このAllahというのはilahにalが付いたのだという説明は正しいと思うのです。その他にクルアーンの中を見るとAllahというのは非常に沢山出ていますし、ilahというのも「あなた方の神」というような時のilah-kumというように言い方とか、あるいは「神は唯一の神である」という時の、唯一の神というのは要するにone godという小文字のa godという言い方をするわけですから、そういう時にはilah wahidという形で出てくるわけです。ただやはりクルアーンの中では多神教徒たちとの論争のような文脈でもしばしば現れますから、そういう中ではilahの複数形というのもアーリハという形で出てくるわけです。基本的にそれは全て、多神教徒たちは神々などということを使うという



ようなニュアンスで出てくるわけです。

後はアラビア語には、セム語一般もそのようですが、双数形dualというものがあります。要するに指すものが二つある場合には、特別な形を持つということです。イラーハイニという二つの神という表現が出てきますが、その場合にはこれも批判的な文脈で出てきます。これもまたキリスト教との関わりもあって、神がイエスに対してお前は自分自身とお前の母マリアが二つの神であるというように人々に教えたりしているのかと神が尋ねるというような文脈で、このイラーハイニという二つの神という表現が出ています。イスラームは、特に一神性ということを非常に強調していると考えられます。キリスト教などの、三位一体というような視点で神を見ていくことに対して、クルアーンの中には非常に強い批判が述べられており、そういう意味で、神は一つであるということを非常に強調していると思われるわけです。実際に神は一つであるということを表現することが非常に多いのではないかと思います。その中で特に一番よく知られているものに、信仰告白といういわばイスラームの教えの根本をきわめて明確に表現する文句があります。ムスリムはそれをいろいろな場で表現することを命じられたりあるいは期待されているわけです。その信仰告白、アラビア語でshahadaと言いますが、その内容というのは、前半がアッラー以外はいかなるものも神ではないということ、後半はムハンマドが神の預言者であるということ、そういう二つの証言からなります。その前半で神はアッラー以外に存在しないのだということを強く言うわけです。信仰告白の前半部分というのは、クルアーンの中にも形としては全く同じ形で37章35節に出てきます。そういう形でアッラーが一つ、一人であるということを非常に強調するわけで、そういう文脈で三位一体、クルアーンの中では神はこの三つの内の一つであるというような言い方はいけないと、不信仰であるというような表現で出てきます。もちろん、イスラームが理解しているような神

は三人いるというようなニュアンスで、キリスト教が三位一体を理解しているとはいえないと思いますが、少なくともイスラームの立場から見るとこの三位一体というような言葉、表現は神の一神性に反する表現、考えであると見ていくわけです。おそらくそういうような点が非常に知られることによって、イスラームは非常に一神性を重視する宗教だと考えられていったのではないかと思います。

神がアッラー以外にないということと同時に、クルアーンの中にしばしば出てくる表現に多神崇拜があります。これは普通shirkという語で示されます。ただ、shirkという語自体はクルアーンにそれほど沢山の用例はなく、それと同じ語根の動詞形ashrakaや能動分詞形mushrikunaなどの形でよく出て来ます。このshirkという言葉はassociationという意味をもち、要するに神と同じような資格や権威のあるものを神と並べて立てるといったような意味になります。多神崇拜ということ非常に強く否定していくわけですが、宗教を持っている人をイスラームの立場で分類する場合に、ムスリム(イスラーム教徒)、そして「啓典の民」という表現をもちます。このアハル・ル・キターブ(啓典の民)とは神からの啓典を持っている人たちということで、クルアーンの範囲で言えば具体的にはキリスト教徒、ユダヤ教徒、そしてゾロアスター教徒、そして実体は必ずしもはっきり分からないのですがクルアーンの中でサービア教徒といわれる人たちがそれに該当します。ムスリムの他に、これらの人たちと、さらにいわゆる多神教徒といわれるグループに分けて考えていくわけです。ですから一応ユダヤ教、キリスト教は啓典の民であり、アッラーを知っているということで多神教徒には入らないということにはなります。クルアーンの9章の30節には、キリスト教徒はマシーフ、要するにメシア、イエスを神の子であると言う。そしてまたその前にはユダヤ人はウザイルを神の子であると言う、というような記述があります。キリスト教徒がメシアを神の子と言うというのは、キリスト教



の文脈でも理解できることだろうと思うのですが、ユダヤ人はウザイルを神の子だと言うというのはユダヤ教の内部にもある考え方なのかかわからないのですが、少なくともイスラームの註解書などを見ますと、ウザイルというのはヘブライ語聖書でいうエズラのことだと。要するにバビロン捕囚からユダヤ人が帰ってきたときにみんなトーラーなどを忘れていた、そういう中でこのエズラ＝ウザイルは神に祈ることによって自らにトーラーの記憶を甦らすことが出来たのだと。そしてそれをパレスチナに帰ってきたイスラエルの人たちに読み聞かせることによってトーラーを復活したのだといひます。これに類する話はヘブライ語聖書にも出てきます。そういったことからその後ユダヤ人の中にはそのような素晴らしい力を発揮したウザイル＝エズラを神の子であると信じた者たちがいるのだという伝承を、イスラームの中では伝えているのです。もしかしたらユダヤ教の周辺部分にそういう考え方があるのかも知れませんが、それは専門の方もいらっしゃるのではござんじであれば教えていただきたいと思ひます。とにかく、そういう形でユダヤ教徒、キリスト教徒というのも確かに神の言葉を受けた啓典の民ではあると、その意味では良いわけですが、実際のキリスト教徒、ユダヤ教徒は、今言ったようなウザイルなどを神の子だと言ったり、あるいは単なる預言者でしかないイエスを神の子だと言ったりしている。このように神の一神性を損なうような考え方を持つに至っていることを考えれば、キリスト教徒、ユダヤ教徒も実質的にはmushrik、すなわち多神教徒、になるという理解、考え方もあるわけですが。このような観点に立てば、イスラームというのは神は一人、一つだということを非常に強調していくという意味で、一神教の中の一神教だというような理解も可能であろうと思ひます。

次に、イスラームとイスラーム以前のアラブの宗教について触れたいと思ひます。これまで述べたことは、どちらかと言うとクルアーンの話を中心に、イスラ

ームの一神性ということの強調を言ったわけですが、イスラームという宗教がアラビア半島に生まれてくるその直前の時代との関わり方は、それなりに面白いというか、考えてみる価値のあることだろうと思ひます。ただ私もそうですがそのような問題については、イスラーム研究者はすでにイスラームが出来上がっているもの、生まれたものというそれから先を考えることが中心になるので、それより前がどうだったかということは、実はあまり考えないのです。ですからそういった意味で十分用意したとは思ひませんが少なくとも今回の発表に関しては、特にイスラーム以前のアラブの宗教というものをどんなふうにか考へているのかということを中心に、いくつかの本を見ました。

話を進めていきますと、最初にクルアーンの53章の19節から23節を引用したのですが、これはいわばマッカ(メッカ)に住む多神教徒たちに対して語りかけた文脈だと思ひます。そこには「あなたがたは、アッラトとウッザーを何であるか考へるか。それから第3番目のマナトを。あなたがたには男子があり、かれには女子があるというのか。それでは、本当に不当な分け方であろう。それらは、あなたがたや祖先たちが名付けた只の名前に過ぎない。神はどんな権威をも、それらに下されなかつた。」という話があり、ここでアッラト、アルウッザー、マナトという三つの名前が出てきます。これはアッラーの娘たちとイスラーム以前に言われていた三つの神々なのです。クルアーンのこの文句に関しては一つの物語、逸話というものであつて、今読んだような表現になっているわけですが、最初ムハンマドが神の言葉だと言つて聞いた時には実はこうではなかつたという説があります。それはここでいう「アッラトとウッザーを何であるか考へるか。それから第3番目のマナトを。」とそこまでは一緒なのですが、その後「これらは偉大な仲介者である。彼らのとりなしは期待できる。」というような言葉でムハンマドは最初にこの文句を伝えたといひます。ですからアッラト、アルウッザー、



マナートという三つの神々というのはいわば仲介者として、それより上にあるアッラーに対してとりなしをしてくれるような、役に立つ仲介者なのだというような意味の言葉だとして伝えたとのことです。ただそれは、実はサタンによってその言葉を喋らされたのであって、本当の神の預言の言葉ではなかったのだということで、今ある言葉に置き換えたことと伝承は説明しています。この節は「悪魔の節」satanic verseと言っているものです。

ここでは今述べたように、アッラーに対する仲介者となるような低い神々というものが出てくるわけですが、それと同じように39章の3節に多神教徒たちとの話ということで、多神教徒たちはこんなふうなことを言うように記されています。「私たち(多神教徒たち)が彼ら神々に仕えるのは、ただ私たちが神アッラーのおそばに近づくためである。」と、そういうことを多神教徒たちは言って、いわば偶像崇拜といわれるようなものを合理化しているのだ、という言い方をしています。

この39章3節と関連づけて見れば、アッラート、アルウッザー、マナートをアッラーの仲介者と見るという考え方は、イスラーム以前のアラブの宗教のなかに存在していた見方だろうということはかなり確率で言えることだと思います。このマナート、アッラート、アルウッザーという神々については、イスラームの世界でも歴史家というか伝承家という人たちが書物を著わしています。配布資料の文献表にイブン・カルビーの『偶像の書』を載せました。どうもこれが一番の基本的な資料になるものようで、日本語訳もありますので簡単に目を通すことができます。そういう中ではマナートという神は、マディーナとマッカとの間の海岸の部落にあったもので、それに対してムハンマドが属していたクライシュ族とかアラブのいろいろな人たちが犠牲を捧げるという形で関わっていたといっています。アッラートはターイフというマッカの近くにあった四角い岩だといっています。アルウッザーもマッカの近くのある谷に置い

てあった偶像であるといい、そのアルウッザーに対しては参詣を行ったり、供物を届けたりあるいは動物の生け贄を捧げたりしていたといっています。そしてクライシュ族はマッカの神殿カーバと同じようにアルウッザーのためにも聖域をもうけて、その中に動物など、生きているものが逃げ込んだ場合にはそれを追いかけることは出来ないというような禁域の信仰を持つものだったと言っています。そのようなアッラーの娘たちと言われるような神々が、近くのいろいろなところに祀られていたわけですが、今まさにカーバの聖殿といわれているところはイスラーム以前からそのカーバの建物があったわけで、当時はその中にいろいろな偶像が置かれており、その中でも特にフバルとういものが一番重要な偶像だったといわれています。それは紅玉瑞(こうぎよくずい)という一種の宝石でできていたが、イブン・カルビーの表現によれば、左手が取れていたのをそれを金で補修してあったと詳しく記述されています。とにかくそういう神々というものが祀られていたというわけです。

今確かにアルウッザーとかマナートとかアッラートという名前を挙げたわけですが、そういう環境のなかでイスラームで神といわれるアッラーはどのようなふうな形で表現されていたのかというのが問題になります。この問題については必ずしも資料が十分にあるわけではなく、かなり推測に基づく論述だとは思いますが、ユリウス・ウェルハウゼンというドイツの学者の研究が基本になっているようです。その後のいろいろな研究を見ても基本的な研究としてウェルハウゼンを参照しています。確か彼は旧約学の中でも大きな仕事をした有名な学者だったと思います。先ほどもアッラーというのはセム族での神名の一般的な表現だというような言い方をしましたが、彼の言及などから見ても、やはりそういうふう考えるようです。いろいろな神々が存在しており、アッラーという語はそういった神々を一般的に呼ぶ呼び名だったのだと考えるのです。ですか



ら例えばアルウッザーとかマナートも、アルウッザーというアッラーという言い方が可能であり、またターイフのアッラーといえばターイフに祀られている神、すなわちアッラトであるというような意味合いで使われていたのではないか。この辺は半分推測の話ですから、肯定も否定もどちらもできてしまうかもしれません。ただアッラーというものがある意味で一般的な表現だということから、個々の神の特徴からは区別されてきて、そしておそらくそれが実体視されてきて、個々の具体的な名前を持つ神とは違う独自の存在を持つ神になっていったのではなかろうかというようなことを言うわけです。他のアルウッザーとかマナートとかに対してはしばしば犠牲を捧げるといふ儀礼があったわけですが、アッラーという名前と呼ばれる神に対してはどうもそういうものが無かったようだと述べています。

クルアーンの106章3節、一番後ろの方のクルアーンで、それは非常に早い時期の啓示だと考えられると思いますが、そこに「クライシュ族の保護のため、冬と夏の彼らの隊商の保護のため彼らにこの聖殿の主になせよ。」とあります。この聖殿の主はカーバの聖殿の主と考えるわけで、もちろんクルアーンの中ではこれはアッラーだというのは、この言葉が啓示された時期で言えばカーバというのはまだ異教の神々を祀っていたわけですが、そういう意味ではこの聖殿の主というのは一体何だという疑問が出てくるのです。この辺は必ずしもすんなりと筋道が通って理解できるという感じではないのですが、カーバの神殿にはかつてはフバルという像が立っていたので、聖殿の主というのはこのフバルのことだったのではないかと推測するわけです。それと先ほどアッラーという名前は一般的な神を指す言葉だったということと考えあわせると、「カーバのアッラー」というのは即ちフバルだと、ウェルハウゼンなどは考えていきました。フバルという偶像がカーバの神殿に置いてあったということは、イスラームの中でも歴史的な物語と

しては伝えられているわけで、そういった神のことを一般的なカーバの神という意味でフバルとアッラーとは、同じものを言っていたのではないのかという推測を進めていくわけです。ウェルハウゼンが彼の議論の中で、こういうハディースがあると言っています。預言者ムハンマドの祖父であるアブドルムッタリブがカーバで生け贄をアッラーに捧げようとしたが、アッラーはどういう生け贄をとるのか、山羊がよいのか駱駝がよいのかというようなことだと思いますが、何がよいのかをフバルに尋ねたという内容のハディースです。ただなぜか出典が書いてないので、一応私もフバルという名前でもハディース集を検索してみたのですがそれに当たるようなものは見つからなかったのですが、あるとしてもかなりマイナーな、通常ハディース集には入っていないようなものであろうと思っています。

そういう話もあって、イスラーム以前の状態の中ではアッラーとカーバの神フバルを、紛らわしい状況で捉えていたと言えるようなのです。イスラーム以前の時代といっても全て偶像万歳というような状況ではなかったようで、偶像に対する信仰というものがかなり合理的というか、あまりまともに信じていないという点があって、それもこの『偶像の書』にいくつか話が出ています。タイという地名がありますが、そこにはファルスという名前の像があると。それは何か山腹の岩で、その岩の一部が人間の姿のような格好をしている、それをファルスという名前の神というか偶像として考えていたと言います。生け贄を捧げたりもし、そしてその地は禁域にされていて、動物などがそこに逃げ込むとその所有権は神に、実際には管理人のものに、なってしまうというようなことです。飼っていた駱駝に逃げ込まれてしまった男が、管理人がここは禁域だからお前には所有権はないと言ったにもかかわらず、その男は駱駝を持って行ってしまった。そこで管理人が怒って神にその男を罰するように祈ったが、実際には何も起こらなかった。その神は無能だということが分かったので、この男は



そこで偶像崇拜をやめてキリスト教徒になった。そしてその後ムスリムになったというような伝承です。このようにイスラーム以前のアラブの宗教状況は、さまざまな神、神像に対する崇拜から成り立っていたわけですが、必ずしも大真面目なものだけではなく。そしてそういう中でもアッラーという名前はやはり知られていて、どうも一般的な神という意味で知られていたようだと考えられています。

話の順番が変になったのですが、クルアーンの29章の61節というところから数節にわたってまた議論があって、いわゆる多神教徒と言われているアラブの人たちに対して、誰が天と地を創造し太陽と月を服従させるのかと聞いたならば、そういった多神教徒たちは必ず神(アッラー)と答えると。天地を創造するというような役割は、イスラーム以前のアラブの人たちにもアッラーが行うことだという理解があった、ということです。同じように、誰が天から雨を降らせそれで死んでいる大地を甦らせるのかと聞いたならば、やはり多神教徒たちも神(アッラー)と答えると。そんなふうな言い方があって、イスラーム以前のアラブの社会、——この場合、アラブといってもアラビア半島というのは地域的にあるいは宗教的にも三つ位に分けて、南アラビア、中部アラビア、私が話しているのは中部アラビアでヒジャーズ地方と言われている所です。後はもう少し北の方のシリアなどに近い地域もイスラーム以前の宗教としてはやや違った形態のものがあったと考えられています。——イスラーム以前のアラブの社会では、今申し上げたような形で、アッラーという名前は知られており、そしてその神というのは創造者というような、イスラーム期にあっても非常に重要な意味を持つ、そういう働きを持つものとしては考えられていた。しかしあまり具体的な特定の石ころに宿っているというような形で崇拜の対象、あるいは生け贄を捧げる対象という形では考えられていなかった、と推測されています。そういう意味で、イスラーム期に至っていわば多神教の文脈・環境の中で存

在していた神(アッラー)といったものが、いわばムハンマドへの啓示を通して一神教的な神として理解されるようになるわけです。

次に、イスラームにおける神理解の諸相です。イスラームの中で神はどういうふうを受け取られるのかという議論なのですが、これではあまりにも広い話になりますので要点をкаいつまんでお話ししたいと思います。イスラームの入門書などを見ると大抵出ていますが、宗教の名としての固有名詞のイスラームのほかに、イスラームという語は、服従するとか帰依するという意味がアラビア語の意味としてあるのだと言われています。最近イスラームという宗教はどういう宗教かを説明するときに、私は「全人間的な宗教」という言い方をします。こういう説明をするのとどの宗教でもそうだとされるのですが、以下に述べるような観点でこの表現を使いたいと思っています。すなわち、宗教は人間性全てが関わると言ってしまうとそれ切りですが、人間のあらゆる活動、手足を動かす活動、口を動かす活動、あるいは心の中でいろいろなことを思う活動、そういう全ての人間の活動において神というものの權威を認め、そしてその神の意図に従うような形で過ごしていくこと、それがイスラームという宗教の基本的な立場だと考えており、このような態度を「全人間的な宗教」と呼びたいのです。そういう中で、神と言われるものはさまざまな形で立ち現れてくると思います。それを一応三つに分けて、立法者、信仰内容を定める者、そして人間に内在する神という、三つのあり方にまとめてみました。

最初の立法者というのは、人間の行動というのは全て神の意図にかなう形で行われるべきだというニュアンスを持ちます。よく知られている豚肉を食べてはいけない、という規定も神がそれを禁じているからであり、このほかあらゆる局面での人間の行動について神は規範を定めると考えます。そういう意味でこの場合の神というのは、人間に対してあれをしなさい、これはしてはいけない、その



中にはこういうことはしてもしなくてもいいですよというものもあるのですが、このような命令者という形で人間に関わってくる。そのあり方、神と人間との関係、はおそらく主人と奴隷、アラビア語で言うラップとアブドという関係にあると言えるでしょう。

2番目の信仰内容を提示するというで、いわゆる教義とか神学とかの問題です。人間が神をどういうふうに捉えていくかという議論になるわけですが、被造物である人間たちに比べると、神は被造物に対する創造者であるということで、要するに人間たちとは全く違う、そして被造世界である世界とも全く違うものとして見られていくわけです。そういう意味ではこういう神学などが捉えていく神は、いわば人間あるいは世界を超えたものという形で、それを表現していこうとするのだと思います。

3つ目は人間に内在する神という言い方をしましたが、これは主に神秘主義の問題であり、あるいは哲学もイスラームの文脈ではそこに入ってくるのかなという気がします。こういう領域、あり方、の中では神と人間がどう関わってくるのかというと、先ほどの主人と奴隷という形とは全く違います。神秘主義というのは人間なら人間の魂というのが何らかの形で絶対者と、あるいは神と言われるものと一つになるのだということをいろいろな表現を通して考えていくという特徴を持っています。神と人と一つになるという神秘主義的な考え方では、主人・奴隷という文脈から言えば、主人が奴隷になるということにもなってしまうわけです。ですからそこら辺は神を理解すると言っても主人・奴隷的あるいは法学的と言ってもよいと思うのですが、そういった関わり方とは全く違う種類の関わり方というのがここでは出てくるだろうと思います。ここに神秘主義の2類型というところで包摂的、排除的という言葉を出したのですが、これも先ほど中田さんがいわれた言葉とよく似ているのですが、神秘主義の二つの類型を考えたということです。イスラームの中での有名な神秘家であるハッ

ラージュという人は、私は真理である、私は神であるというような表現を通して自分と神との一体性・同一性を述べたと言われていた人物ですが、そういうタイプの神秘主義というものを私はここで排除的という言葉で表現しました。これは私が勝手に思い込んでつけている名前ですから先ほど中田さんが話されたニュアンスとは違うかもしれませんが、排除的というのはどういう意味かというと、人間が神と向かい合って人間が住んでいる世界とか宇宙とかといった一切のものを考慮しないで、つまり排除してただ私は常に神を見る、神にしか相手を見ないというタイプの神秘主義だと言っているわけです。神秘主義の文学作品ですとしばしば男女の恋愛を持ち出して対比的に語られることが多いわけですが、まさにそういうことで、私は貴方が大好きです、ですから私は貴方しか見えません、他のものなどどうでもいいのです、というタイプの神秘主義だというふうに考えています。そういう意味で排除的という言葉を使いました。

それに対して包摂的な神秘主義というのは、具体的にはイブン・アラビーという13世紀の神秘家の世界観を念頭において考えています。神と人間が向かい合うことによってそれ以外のものに関心を持たないとか、それ以外に心を向けないというようなものではなくて、自分を含めたこの世界というものそれ自体が何らかの形での神、あるいは絶対者の顕現したものなのだと、あるいは絶対者が世界という形で現れているのがこの私でありこの世界なのだ、というふうにするタイプの思想です。それは私と神というものだけではなく、私だけではなく宇宙全体が神そのもの、神と何らかの意味での一体性を実現するのだという意味での包摂的という言葉を使っているわけです。神秘主義ということ言えば、共に同じように神とか絶対者と一つになるということを言うわけで、それ自体、先ほど申し上げたような法学的な主人と奴隷タイプの考え方とはとても違うということはあるわけですが、同時に神秘主



義の中でも包摂的排他的ということを見ると、私という人間一人と神との間の一体性を主張するというものと、自分を含めた世界全体が神の何らかの形で顕現であるという形で一体性を維持しているのだというものとは、同じ絶対者・神の理解としても随分違ってきていると思います。ここで幾つか例をあげたのですが、要するに同じ一つの宗教であると思われるイスラームの中でも、やはり神のどういう面を取り出しどういう面と向かい合うかということによって、ものの考え方・思想表現も違って来るのではないかと申し上げたかったのです。もちろん、イスラームの宗教的営みというものは常に神の言葉の体現であるクルアーンを通して行われているわけですし、いま言ったような法学であれ神学であれあるいは神秘主義の人たちであれ、やはりクルアーンを読みそしてその中で自分たちの考え方を展開させているわけです。ですからその意味では、随分違うアプローチをしているのではないかと申すのはいいのですが、まさにクルアーンというテキスト自体が法学的な議論、神学的な議論、あるいは神秘主義的な理解、そういったもの全てをいわば渾然一体に含んでいるというものです。法学、神学などの個々の領域だけで独立させてしまって理解するというのも、やはりそれは全体的には正しいアプローチではないだろうと思うのです。おそらくさまざまなメッセージを放射するクルアーンの全体が、神の意図というものを統合的に表現しているのだとムスリムは考えるのだろうと思うのですが、いかがでしょうか？全体像はひとまずおくとして、個々のアプローチの仕方からはそのアプローチに応じた神の異なる面が現れるのだということ、それがここで申し上げたい点です。

(4)のまとめですが、実は昨日の真夜中にその時は一生懸命考えて思いついたことを書いただけで、一晩寝たら単なる妄想だったということになるかもしれません。多神教、あるいは一神教でも良いわけですが、神なるものと人間との関わりということ

からこの問題は見えていけるのだと思うのですが、一番最初に引用した宣長が考えているような神観念の中での人間と神々との関係というのは、これも最初に申し上げたようにイスラームの中で言えば、人間と神のみならず天使、ジンなどというさまざまなスピリチュアルなもの、そういう全体との関係に対応するだろうと思います。イスラームで神という言葉で指しているものと、日本の宗教で神という言葉で指しているものを安易に同値し、比較するのはやはり正しい理解にはならないと思います。我々日本人がイスラームを見ると、神という言葉自体に何となく日本語のもつそういうイメージが常に付き纏っていると思うのです。ですからそういう意味でイスラームの神というものを考えるのも、日本語を通しての限り日本人にとってはなかなか理解が難しいのではないかと思います。人間の世界と対比される神的なものの世界、すなわち神そのものの世界というのは、ある意味でやはり不可知なものなのです。

クルアーンの中でも神はガイブだと言っています。ガイブというのは目に見えない、知ることができない、要するに人間の知力の及ばない領域(不可知界)という意味であり、このような言葉で神の考えることを行うことを表現しています。ガイブである、不可知であるということ、それが神そのものの在りようであるが、啓示というプロセスを経ることによって、その啓示を通して分かる限りでのみ人間は神のことを理解できるのだ、と言うのです。それをもう少し拡大してみると、ある人が神について理解するというはその人の信仰、心の中、に現れた神である限りで、その人は神を理解しているのだ、ということです。これは先ほど引用したイブン・アラビーという人物が言う言葉ですが、「信仰の中に創造された真理」、「信仰の中に創造された神」という言い方をしますが、イブン・アラビーにあっても神そのものとか絶対者というものはまさにガイブであり、それはもう誰にも分からないと。しかし神が啓示なり何なりの形で自らを現すことによって初めて神を知るこ



とができるのだと。しかしながらそこで知る神というのは、神そのものというのではなく、その人の心に映じた神でしかない。まさにその受け手の心に現れた形でしか神というものは表象できない、理解できないというふうに考えるのです。それはガイブの神と違うのか同じなのかも分からないが、それを通してのみガイブの神の一部なりを人間は知ることができるし、またそれ以外には人間は知ることができないわけです。そういうふうに考えてみると、イスラームの信仰者が理解するイスラームの神がイスラームの神としての神であり、キリスト教徒の理解する神というのはやはりキリスト教徒の理解する神であって、神そのものはやはり分からない。であるけれどもそれぞれの信仰を持つ人、あるいはそれぞれのスピリチュアルな力を持つ人の力に応じる形で、ガイブである目に見えない、知ることのできない神は姿を現している。そしてそこで現れたものしかその人にとっては分からないのだというふうに考えるのです。そうしますと結局、いろいろな人全てにいろいろな形で絶対者である神は自らを現している。そこで現されたものは、その人にとって唯一の神になる。イブン・アラビーもそういうことを言うわけですが、ムスリムの心にはムスリムの神として映るわけですし、キリスト教徒にはキリスト教の神として映る。そしてさらに多神教徒の人に対しても多神教徒の偶像として、絶対者でありガイブである神は現れるのだという言い方をしていきます。

イブン・アラビーはまた詩人としても有名なのですが、彼の書いた詩の一節で有名なものがあります。「私の心はどのような形をとることもできる。それはカモシカの牧場であったり、キリスト教修道士の修道院であったり、また偶像のための寺院、巡礼者のカーバ神殿、トーラーの書板、クルアーンの書物でもある。私は愛の宗教に従う。愛の駱駝がどの道をたどろうと、それが私の宗教であり、私の信仰なのです」という意味のことをイブン・アラビーは詠っています。結局、絶対者そのもの、神そのもの

というものは分からない。であるけれども、神からの働きかけによって個々の人々が知ることができたもの、そのみがかその人にとっては絶対者との通路になるのであって、その意味でその通路は全てその人にとっての絶対者であるということであり、世界の宗教のどんな宗教であってもそれはそれ自体として絶対者の何らかの現れの信仰なのだ。その意味ですべての宗教は同等だと言ってよいのか、あるいは絶対者に対して同じ位置関係を持つのだという言い方をするわけです。

先ほどイスラーム以前のアラブの宗教の話をしました。ウェルハウゼンの後にタウフイーク・ファフドという学者がイスラーム以前のアラブの宗教について大きな本を書いているのですが、彼なども言っている言い方では、イスラーム以前のアラブの神々といったものについて、当時のアラブの人たちがその神性あるいは神の属性についての議論を神学的にしたとは到底思えない、そしてどうも彼らは唯一の神の多様な顕現(エピファニー)であるというふうにそれらを見ていたのではないかと述べています。歴史的にイスラーム以前のアラブの神々というのは、唯一神の顕現だとファフドは言っているわけです。ありとあらゆる宗教で神だと言っているものは、知ることのできないガイブという不可知の神の現れであるというイブン・アラビーの考え方も繋がっているようにも思えます。このイブン・アラビーの思想はしばしばshirkであると、すなわち、多神崇拜であると批判を受けてきました。このイブン・アラビーの思想は、イスラームという、いわゆる一神教中の一神教という中で生まれているわけです。不可知の絶対者、ガイブといったものが顕現のプロセスを経て多様な存在者として現れてくるという考え方は、現象世界の背後に一つの究極的な実在を想定しているという意味で、やはり一神教的だと言えるのではないかと思います。このような点を考慮するならば、一神教、多神教というものを対立的に捉えることはなく、一神教と言われるものの中にも



いわゆる多神教的な要素が現れてくると考えられます。イスラームという思想の文脈の中でも、イブン・アラビーのような考え方も出てくるわけです。

そしてまた逆に多神教的な文脈・環境の中でも一神教的な要素というものはやはり現れてくると思います。例えば一番に思いつくものとして、仏教ではいろいろなブッダを構想するわけですが、そのさまざまなブッダというものは唯一の法身、ダルマの顕現であると説明することができます。沢山のブッダの背後に一つの法身という観念をおくというのは、ある意味で様々な神々というのも全て何らかの形で絶対者の現れである、とする一神教的文脈の中で出現したイブン・アラビーの思想と、強い親和性を持っているのではないかと思います。そういう意味でイブン・アラビーの思想が汎神論的だとは必ずしも簡単には言えないと思います。いわば一神教の中にもあるいは多神教の中にも、等しく見出し得るような、一神教と多神教と分かれる中の中間領域というような汎神論的な状態、もう少し正確に言うならばむしろ万有在神論 panentheism というような領域、そしてそういう領域が全ての宗教にあり、そういう中間領域というものがあるいは一神という形で凝縮したり、あるいはそれが拡散してさまざまな神々という形になったりするというような考え方も、もしかしたらできるのかもしれない。これはもちろん歴史的な観察に基づくというよりも、良く言えば素晴らしい洞察に、悪く言えば単なる思い付きに基づく観念でしかないのですが、一神教、多神教という言葉自体が価値観に汚されているという現在の状況の中ではむしろ混沌の状態によく分からない汎神論的あるいは万有在神論的な神観というものに着目し、それが一神性あるいは多神性という方向に拡散したり凝縮したりすることによっていろいろな種類の神観がでてくるのだという理解の道筋も存在するかもしれない。このように考えて、最後に付け足させていただきました。実はこれは昨晚思い付いてまと

めてみたもので、蜃気楼のようなものかもしれません。一神教、多神教というような言葉は確かに非常に分かりやすい表現だと思うのですが、分かり易いだけに安易なレッテル貼りに使われているように思います。そこで少し分かりにくくして、しかしどちらに対しても同じような距離を持てるような表現はないかと思い、神性拡散型、神性凝縮型というような表現をあえて提示した次第です。

一応、今日の話はこれで終わりにさせていただきます。



同志社COE研究会 2004.03.06

「イスラームと一神教の展開」レジュメ(Ver.2)

鎌田繁 (東京大学東洋文化研究所)

(1) 一神教の神・多神教の神

一神教/多神教 神の表象が単数か複数か、ということ。

神の観念 一神教的「神」と多神教的「神」。

例：宣長のカミ

「さて凡てカミとは、いにしへの御典(みふみ)どもに見えたる天地のもろもろの神たちを始めて、それを祀れる社にいます御霊(みたま)をも申し、また人はさらにもいはず、鳥獸(とりけもの)木草のたぐひ海山など、そのほか何にまれ、尋常(よのつね)ならずすぐれたる徳(こと)のありて、可畏(かしこ)き物をカミとはいふなり。」『古事記伝』三之巻(本居宣長全集<筑摩書房昭和43>第9巻125-126)

神表象そのものが違っている場合、その単数/複数をいうことはどれだけ意味があるのか?

カミガミ：神(アッラー)、天使、シャイターン、ジン、聖者など

(2) 一神教としてのイスラーム

Allah al-ilah

uイスラーム 一神教のもっとも高度に実現したものというとらえ方あり。

キリスト教の三位一体説の批判。

「信仰告白」shahāda前半：「神のほかにはいかなる神的存在もない」lā ilāha illā Allāhu
「かれらは、「神の外に神的存在はありません。」と告げられると、いつも高慢になった」inna-hum kānū idhā qila la-hum lā ilāha illā Allāhu yastakbīruna (37:35)

「<神は三(位)の一つである。>と言う者は、本当に不信心者である。」(5:73)

b 多神崇拝shirkの否定

「同位者を配す」、「伴侶をもうける」、「仲間をつくる」

ムスリム、啓典の民、多神教徒。と3分類することが多く、宗教の分類の概念としては原理的、理論的に、ユダヤ・キリスト教はshirkではないことになるが、ウザイル(エズラ)、イエスを神の子とする(9:30参照)彼らは、実際的には多神教徒(mushrik)であるとされる。

「ユダヤ人はウザイルを、神の子であるといい、キリスト教徒はマシーフを、神の子であるという。これはかれらが口先で言うところで、昔の不信心な者の言葉を真似たものである。かれらに神の祟りあれ。かれらは(真理から)何と迷い去ったことよ。」(9:30)

c イスラームとイスラーム以前のアラブの宗教

「あなたがたは、アッラートとワッザーを(何であると)考えるか、それから第3番目のマナートを。



あなたがたには男子があり、かれには女子があるというのか。
 それでは、本当に不当な分け方であろう。
 それらは、あなたがたや祖先たちが名付けた（只の）名前に過ぎない。神は（どんな）権威をも、それらに下されなかった。・・・」（53：19-23）
 また39：3参照。
 フバル カーバ神殿におかれていた偶像。

（3）イスラームにおける神理解の諸相

イスラームのなかで神はどのように受け取られているか。人間がどのように捉えているか。

- a.立法者 行動の規範を定める者として 法学など
 命令者としての神 主人と奴隷
- b.信仰内容の提示者 教義確定の典拠 神学など
 世界の外にある神 人間を超え、接点をもたない超越性
- c.人間に内在する神 体験知 神秘主義、哲学など
 世界と一体となった神
 神秘主義の2類型：包摂的inclusive/排除的exclusive
- 1-ハッラーシュ（922没）「私は真理（神）である」
- 2-イブン・アラビー（1240没）存在一性論

（4）まとめ

単数形であれ複数形であれ、その神と、不可避的に複数的である人間（被造物）との関係を視野にいれることで、一神教/多神教の枠組みを再考できないか。
 ←イブン・アラビー「信仰のなかに創造された真理（神）」al-haqq al-makhlūq fi al-ʿuqūd
 神性拡散型と神性凝縮（局限）型 いわゆる「汎神論」の効用？

<文献>

- イブン・カルビー[bn al-Kalbi, 『偶像の書』 *Kitāb al-asmāʾ*（池田修訳「イブン・アル・カルビー『偶像の書』（訳）」深井曾司編『西アジア史研究』東京大学出版会、1974。『東洋文化』54（1974）1、165-202）
- 鎌田繁「一神教/多神教」『岩波哲学思想事典』岩波書店 1998
- 鎌田繁「イスラームにおける他宗教の理解 イブン・ハズムの創世記世判」『宗教と寛容 異宗教・異文化の対話に向けて』竹内整一・月本昭男編、大明堂、1993、220-238。
- 鎌田繁「神秘主義とシーア・イマーム論の出会い ファイド・カーシャーニーの完全人間論」『超越と神秘 中国・インド・イスラームの思想世界』鎌田繁・森秀樹編、宝積比較宗教・文化叢書2、東京：大明堂、1994、291-310
- 鎌田繁「クルアーンとイスラームの諸思漸」『岩波講座宗教4』、岩波書店2004（近刊）
- 鎌田繁「イスラームの知と宗教間対話の意味」『グローバル時代の宗教間対話』皇



川啓慈・山梨有希子編。大正大学出版会 2004 (近刊)

東長靖 「「多神教」的イスラーム—スーフィー・聖者・タリーカをめくって」歴史学研究会編 『社会的結合と民衆運動』 (地中海世界史第5巻)、青木書店、1999、192-220頁。

中田考『イスラームのロジック』講談社 2001

Camilla Adang, *Muslim Writers on Judaism and the Hebrew Bible From Ibn Rabban to Ibn Hazm*, E.J.Brill, 1996

Corbin, Henry, *Creative Imagination in the Sufism of Ibn 'Arabi*, Princeton, 1969

Fabré, Toufic, *Le Panthéon de l'Arabie Centrale à la Veille de l'Hébreu*, Paris, 1968

Lazarus-Yafeh, Hava, *Intertwined Worlds: Medieval Islam and Bible Criticism*, Princeton, 1992

Ryckmans, G., *Les Religions arabes préislamiques*, Louvain, 1951

Walt, W. Montgomery, *Bell's Introduction to the Qur'an*, Edinburgh, (1970)

Wellhausen, Julius, *Reste arabischen Heidentums*, Berlin, 1964(1887)